

# 藪の中

芥川龍之介



# 檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに  
 違ちがひございませぬ。わたしは今朝けさ何時いつもの通り、裏山うらやまの杉すぎを  
 伐きりに参まゐりました。すると山陰やまかげの藪やぶの中なかに、あの死骸しがいがあつ  
 たのでございます。あつた所ところでございますか？ それは山科やましな  
 の驛路えきろからは、四五町程ちやうほど隔へだたつて居をりませう。竹たけの中なかに瘦やせ  
 杉すぎの交まじつた、人氣ひとけのない所ところでございます。  
 死骸しがいは縹はなだの水干すゐかんに、都風みやこふうのさび烏帽子ゑぼうしをかぶつた儘まま、仰向あをむ  
 けに倒たふれて居をりました。何なにしろ一刀ひとかたなとは申まをすものの、胸むなもと  
 の突つき傷きずでございますから、死骸しがいのまはりの竹たけの落葉おちばは、蘇芳すはう  
 に滲しみたまはうでございます。いえ、血ちはもう流ながれては居をりま

せん。傷口きずぐちも乾かわいて居をつたやうでございます。おまけに其處そこには、馬蠅うまばへが一匹びき、わたしの足音あしおとも聞きえないやうに、べつたり食くひついて居をりましたつけ。

太刀たちか何かなには見みえなかつたか？ いえ、何もなにございませぬ。

唯ただその側そばの杉すぎの根ねがたに、繩なはが一筋ひとすぢ落ちて居をりました。それから、——さうさう、繩なはの外ほかにも櫛くしが一つひとつございました。死骸しがい

のまはりにあつたものは、この二ふたつぎりでございます。が、草くさや竹たけの落葉おちばは、一面めんに踏ふみ荒あらされて居をりましたから、きつとあの男をとこは殺ころされる前まへに、餘程よほど手痛ていたい働はたらきでも致いたしたのに違ちがひございませぬ。何なに、馬うまはゐなかつたか？ あそこは一たい體うま馬かよなぞには、はひれない所ところでございます。何なにしろ馬うまの通かよふ路みちとは、藪やぶ一つひとつ隔へだたつて居をりますから。

# 檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸しがいの男をとこには、確かに昨日きのふ遇あつて居をります。昨日きのふの、  
 — さあ、午頃ひるいふでございませう。場所ばしょは關山せきやまから山科やましなへ、參まゐら  
 うと云いふ途とちう中ちゆうでございます。あの男をとこは馬うまに乗のつた女をんなと一ましよ  
 に、關山せきやまの方ほうへ歩いて參まゐりました。女をんなは牟子むしを垂たれて居をりま  
 したから、顔かほはわたしにはわかりません。見みえたのは唯ただ萩重はきがき  
 ねらしい、衣きぬの色いろばかりでございます。馬うまは月毛つきげの、— 確たしか  
 法師ほふしがみ髪うまの馬うまのやうでございました。丈たけでございますか？ 丈たけ  
 は四寸よきもございましたか？ — 何なにしろ沙門しやもんの事ことでございま  
 すから、その邊へんははつきり存ぞんじません。男をとこは、— いえ、太刀たち  
 も帶おびて居をれば、弓矢ゆみやも携たづさへて居をりました。殊ことに黒くろい塗ぬり籠えびら

へ、二十あまり征矢をさしたのほ、唯今でもはつきり覺えて居ります。

あの男がかやうになろうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

## 檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄丸と云ふ、名高い盗人でございませう。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、栗田口の石橋

の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございませうか？  
 時刻は昨夜の初更頃でございませう。何時ぞやわたしが捉へ損  
 じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居  
 りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へ  
 て居ります。さやうでございませうか？ あの死骸の男が持つ  
 てゐたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違  
 ひございませう。革を巻いた弓、黒塗りの箆、鷹の羽の征矢  
 が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐたものでござい  
 ませう。はい、馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございませう。  
 その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございませう。  
 それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒  
 を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、

女好きのやつでございます。昨年さくねんの秋鳥部寺あきとりべでらの寶頭盧びんづるの後のうしろ山やまに、物詣ものまうでに來きたらしい女房にようぼうが一人ひとり、女の童めと一わらはしよに殺ころされてゐたのは、こいつの仕業しわざだとか申まをして居をりました。その月毛つきげに乗のつてゐた女をんなも、こいつがあをの男をとこを殺ころしたとなれば、何處どこへどうしたかわかりません。差出さしでがましようございしますが、それも御詮議ごせんぎくだ下さいまし。

## 檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸しがいは手前てまへの娘むすめが、片附かたづいた男をとこでございます。が、都みやこのものではございせん。若狹わかさの國府こくふの侍さむらひでございませす。名なは金澤かなざはの武弘たけひろ、年としは二十六歳さいでございませす。いえ、

優しい氣立でございませうから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございませうか？ 娘の名は眞砂、年は十九歳でござい

ます。これは男にも劣らぬ位勝氣の女でございませうが、まだ

一度も武弘の外には、男を持つた事はございませう。顔は色

の淺黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顔でございま

す。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございませうが、

こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。し

かし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、こ

れだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いで

ございませうから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋

ね下さいませう。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申

す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも、……  
(跡は泣き入りて言葉なし。)

## 多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしませ  
ん。では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからない  
のです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、  
知らない事は申されません。その上わたしもかうなれば、  
卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。そ

の時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、  
 ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思  
 ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲  
 もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやう  
 に見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺し  
 ても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思つてゐるやうに、大した  
 事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺さ  
 れるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、  
 あなた方は太刀を使はない、唯権力で殺す、金で殺す、どう  
 かするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流  
 れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれでも殺した  
 のです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わた

しが悪いわるか、どちらが悪いわるかわかりません。(皮肉ひにくなる微笑びせう)  
 しかし男をとこを殺ころさずとも、女をんなを奪うばふ事ことが出来できれば、別べつに不足ふそくは  
 ない譯わけです。いや、その時ときの心こころもちでは、出来できるだけ男をとこを殺ころ  
 さずに、女をんなを奪うばはうと決心けつしんしたのです。が、あの山科やましなの驛路えきろ  
 では、とてもそんな事ことは出来できません。そこでわたしは山やまの中なか  
 へ、あの夫婦ふうふをつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作さうさはありません。わたしはあの夫婦ふうふと途みちづれにな  
 ると、向むかうの山やまには古塚ふるづかがある、その古塚ふるづかを發あはいて見みたら、鏡かがみ  
 や太刀たちが澤山たくさん出でた、わたしは誰だれも知しらないやうに、山やまの陰かげの  
 藪やぶの中なかへ、さう云いふ物ものを埋うづめてある、もし望のぞみ手てがあるなら  
 ば、どれでも安やすい値ねに賣うりり渡わたしたい、——と云いふ話はなしをしたの  
 です。男をとこは何時いつかわたしの話はなしに、だんだん心こころを動うごかし初はじめま  
 した。それから、——どうです、慾よくと云いふものは、恐おそろしいで

はありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦  
 はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見  
 來てくれと云ひました。男は慾に渴いてゐますから、異存の  
 ある筈はありませぬ。が、女は馬も下りずに、待つていと  
 云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふの  
 も無理はありますまい。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺  
 にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へは  
 ひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、や  
 や開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂ぐるのには、  
 これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分け  
 ながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謠をつきま

した。男はわたしにさう云はれると、もう瘦せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、——わたしは其處へ來るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？ 繩は盗人の難有さに、何時塀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を頬張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありますま

い。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間にか懐から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見たい事はありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはどうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に

うち 打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしると云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。)男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。

——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早い

人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。  
 — わたしはさう考へると、今度はわたしへの命ですから、太刀  
 や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處  
 にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は  
 申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはいる  
 前に、太刀だけはもう手放してゐました。——わたしの白状  
 はこれだけです。どうせ一度は櫓の梢に、懸ける首と思つて  
 りますから、どうか極刑に遇はせて下さい。(昂然たる態度)

## 清水寺に来れる女の懺悔

— その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしま

ふと、縛しばられた夫を眺めながら、嘲あざけるやうに笑わらひました。夫はどんなに無念むねんだつたでせう。が、いくら身悶みもだえをしても、體中からだぢゅうにかかつた繩目なわめは、一層そうひしひしと食くひ入いるだけです。わたしは思はず夫の側そばへ、轉まろぶやうに走はしり寄よりました。いえ、走はしり寄よらうとしたのです。しかし男をとこは咄嗟とつさの間に、わたしを其處そこへ蹴倒けたふしました。丁度ちやうどその途端とたんです。わたしは夫の眼めの中に、何なんとも云いひやうのない輝かがやきが、宿やどつてゐるのを覺さとりました。何なんとも云いひやうのない、——わたしはあの眼めを思おもひ出だすと、今いまでも身震みふるひが出でずにはゐられません。口くちさへ一言ひとことも利きけない夫は、その刹那せつなの眼めの中に、一切さいの心こころを傳つたへたのです。しかも其處そこに閃ひらめいてゐたのは、怒いかりでもなければ悲かなしみでもない、——唯ただわたしを蔑さげすんだ、冷つめたい光ひかりだつたではありませんか？ わたしは男をとこに蹴けられたよりも、その眼めの色いろに打う

たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を

御覽ごらんになりました。わたしはこのままあなた一人ひとり、お残のこし申まをす譯わけには参まりません。」

わたしは一生懸命しやうけんめいに、これだけの事ことを云いひました。それでも夫をつとは忌いまはしさうに、わたしを見みつめてゐるばかりなのです。わたしは裂さけさうな胸むねを抑おさへながら、夫をつとの太刀たちを探さがしました。が、あの盗人ぬすびとに奪うばはれたのでせう、太刀たちは勿論もちろん弓矢ゆみやさへも、藪やぶの中なかには見當みあたりません。しかし幸さいひ小刀さすがだけは、わたしの足あしもとに落おちてゐるのです。わたしはその小刀さすがを振ふり上あげると、もう一度夫をつとにかう云いひました。

「ではお命いのちを頂いただかせて下さください。わたしもすぐにお供ともします。」  
夫をつとはこの言葉ことばを聞きいた時とき、やつと唇くちびるを動うごかしました。勿論もちろん口くちには笹ささの落葉おちばが、一ぱいにつまつてゐますから、聲こゑは少しも聞きえません。が、わたしはそれを見みると、忽たちまちその言葉ことばを

覺さとりました。夫をつとはわたしを蔑さげすんだ儘まま、「殺ころせ」と一言ひとこと云いつたのです。わたしは殆ほとんど、夢ゆめうつつの内に、夫をつとの縹はなだの水干すみかんの胸むねへ、ずぶりと小刀さすがを刺さし通とほしました。

わたしは又またこの時ときも、氣きを失うしなつてしまつたのでせう。やつとあたりを見みまはした時ときには、夫をつとはもう縛しばられた儘まま、とうに息いきが絶たえてゐました。その蒼あをざめた顔かほの上うへには、竹たけに交まじつた杉すぎむらの空そらから、西日にしびが一ひとすぢ落ちおちてゐるのです。わたしは泣なき聲こゑを呑のみながら、死骸しがいの繩なはを解とき捨すてました。さうして、——さうしてわたしはどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申まをし上あげる力ちからもありません。兎とに角かくわたしはどうしても、死しに切きる力ちからがなかつたのです。小刀さすがを喉のどに突つき立たててた、山やまの裾すその池いけへ身みを投なげたり、いろいろなことして見みましたが、死しに切きれずにかうしてゐる限りかき、これも自慢じまんにはなり

ますまい。(寂しき微笑) わたしのやうに腑甲斐ないものは、  
 大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れま  
 せん。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわ  
 たしは、一體どうすれば好いのでせう？ 一體わたしは、  
 わたしは、——(突然烈しき歎歎)

## 巫女の口を借りたる死靈の物語

——盗人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を下した儘、い  
 ろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の  
 根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くば  
 せをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても謊

と思へ、——おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？ 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚

に燃えなかつたためしはない。妻は確かにかう云つた、——  
 「では何處へでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、  
 今程おれも苦しみはしまし。しかし妻は夢のやうに、盗人に  
 手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失  
 つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい  
 い。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐ  
 られません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び  
 立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやう  
 に、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとす  
 る。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があ  
 らうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れ  
 た事があろうか？ 一度でもこの位、——（突然迸る如き

嘲笑てうせう）その言葉ことばを聞いた時は、盗人ぬすびとさへ色いろを失うしなつてしまつた。「あの人ひとを殺ころして下ください。」——妻つまはさう叫さけびながら、盗人ぬすびとの腕うでに縫すがつてゐる。盗人ぬすびとはぢつと妻つまを見た儘まま、殺ころすとも殺ころさぬとも返事へんじをしない。——と思おもふか思おもはない内に、妻つまは竹たけの落葉おちばの上うへへ、唯ただ、一蹴ひとけりに蹴倒けたふされた、（再ふたたび、進ほとぼしる如ごとき嘲笑てうせう）盗人ぬすびとは靜しづかに兩腕りやううでを組くむと、おれの姿すがたへ眼めをやつた。「あの女をんなはどうするつもりだ？ 殺ころすか、それとも助たすけてやるか？ 返事へんじは唯ただ領うなづけば好よい。殺ころすか？」——おれはこの言葉ことばだけでも、盗人ぬすびとの罪つみは赦ゆるしてやりたい。（再ふたたび、長ながき沈黙ちんもく）

妻つまはおれがためらふ内うちに、何なにか一ひと聲叫こえぶが早はやいか、忽たちまち藪やぶの奥おくへ走たり出した。盗人ぬすびとも咄嗟とつさに飛とびかかつたが、これは袖そでさへ捉とらへなかつたらしい。おれは唯ただ、幻まぼろしのやうに、さう云いふ景色けしきを眺ながめてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの繩を切つた。「今度はおれの身の上だ。」——

おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も静かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは繩を解きながら、ぢつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？

(三度、長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなる、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來

ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、  
——それも次第に薄れて来る。もう杉や竹も見えない。おれ  
は其處に倒れた儘、深い静かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれは  
そちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇  
が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そ  
つと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度  
血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈ん  
でしまつた。……

(大正十年十二月作)

藪の中 巫女の口を借りたる死霊の物語

底本：「現代日本文学全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社  
1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」  
1922（大正11）年1月1日

※表題は底本では、「藪《やぶ》の中《なか》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。